

ヨーロッパ博物館視察記 IV

Survey Reports of the Museums in Europe IV

間 多 善 行
Yoshiyuki MADA

フィレンツェ

ローマが古代と中世を代表するのに対して、フィレンツェはルネサンスを象徴する街である。その代表が今もフィレンツェの街の真真中にどっしりと坐を占めている「花のサンタマリア寺院」とメディチ家政庁である。ローマと違ってフィレンツェは近代建築は1つも建っていないから、恐らくメディチ家の栄えたときのまを今に残している街だと思う。「花のサンタマリア寺院」はドームを持った教会の最初である。これができる前は教会といえは中世以来、天に突きささるような尖塔の林立したゴシック建築に決っていた。このドームがフィレンツェにできたことは、中世の暗黒といわれる暁闇を破って、ルネサンスが光を放ち始めた象徴だと考えられている。それでは「歴史博物館・ローマ」についてももう1つだけ「ルネサンス博物館・フィレンツェ」におつきあい頂きたい。

8. ルネサンス博物館・フィレンツェ

イタリア半島の付根の部分に位するフィレンツェは、トスカナ共和国の中心都市として、東にベネチア共和国、西にミラノ公国を控えて、ベネチアから入って来る東方の物資を陸路北ヨーロッパへ、海路ジェノアを経て地中海西部沿岸へ売捌く分岐点として、重要な中継基地であったから、フィレンツェの豪商メディチ家が政治の実権を握るようになり、15世紀の中頃、メディチ家の当主ロレンツォが競走者を倒して、独裁政権を樹立してからは、まるで王候のような生活を送るようになり、学問、芸術のパトロンとしてルネサンスの展開に大きな貢献をしたことは、これからの展示をご覧頂ければわかる。

それでは、これからそのメディチ家の栄光と没落を語る資料を観察して行こう。

(1) メディチ家政庁

始めはフィレンツェ共和国の、途中からメディチ家・政務機関の役所として使われていた建物群で、主屋は間口・奥行とも30メートル位の7階建の石造建築である。この主屋には教会のような塔が付属している。

布令を出すときに鐘でも鳴らしたのであろうか。この主屋の後ろに同じ位の建物があり、それからお幾つか、同じ位の建物があるらしいが中へは入れないので、充分わからない。主屋の前は100メートル四方位の広場になっており、一面に石畳を鋪いてある。その石畳の政庁寄りの中央に径2メートル位の円形の石を埋め込んであり、更にその真真中に1メートル径位の堅い石をモザイクのように埋めて、それに相当長い文章を彫り付けてある。別に段差があるわけではないから、普通の観光客は気が付かずにその上を右往左往している。ガイドの説明によると、ここが1498年サボナローラが火刑に処せられたところだとのことである。日本ならば碑でも建てるどころだが、広場で土足にかけて平気なところはお国柄の違いだろうか。さて、そうして見ると、この広場はメディチ家の栄光と没落を具に見届けていたわけである。すなわち、1434年コシモ・デ・メディチがフィレンツェの政権を握ってから、1494年フランスのシャルル8世の来襲によってメディチ政権が倒され(メディチ家そのものは現在も続いている)、その後を民衆に押されて支配権を握った予言者サボナローラが恐怖の神権政治を布いたが僅か4年間で、その民衆の手で火刑に処せられるという劇的な最後を遂げたわけである。考えて見れば、この狭い政庁前広場と、短いメディチ家統治の60年間で、中世を切り開いてヨーロッパに近世をもたらしたルネサンスの幕あけの舞台となったところである。

(2) ウフィツィ美術館

メディチ家の残した文化的業績を語るものが、このウフィツィ美術館に収蔵されている歴大な美術品である。規模はバチカン程大きくはないが、バチカンによく似た中世の、片側に広いギャラリーが通って、一方に部屋が続いている。学校の建物に似た構造の2階建である。ちょうど政庁の向って右側に、コの字型の中庭を政庁に向けたように建っている。これは恐らくメディチ家の住居部分であったろうと思われる。その1棟が美術館に使われている。その中味はちょうど、西

洋美術史のルネサンス期絵画の代表作品を一堂に集めたようである。中世末期の作品から始まって、ジョットー、フラ・アンジェリコ、ボッティチェリ等の大作を始め、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロから、ベネチア派のジオルジョーネ、ティツィアーノ、ティントレットに至る迄、余すところなく、代表作といわれるものは殆んど集まっていると言っても過言ではない。往年の世界的美術評論家、矢代幸雄氏が若き日をここの美術館の虜となって、数年間をボッティチェリ、ティツィアーノ、ティントレットの研究に没頭し、その研究発表で一躍ヨーロッパ美術評論界に、日本に矢代ありと知られるようになったことを見ても、ウフィツィ美術館のルネサンス初期絵画が、ヨーロッパ美術評論界で重要視されていたことがわかる。絵画だけではなく、彫刻や家具類もこの美術館の至るところに飾られている。ウフィツィ美術館に限らず、一体にヨーロッパの一流美術館は列品が展示室に充ち溢れているように感じるの、私だけであろうか。それに引換えて、上野の東博などはガランとした大きな室に、点々と並べられていて寒々とした感じがする。大英博物館の工芸室などは大きなガラス張りの飾り棚に、まるで骨董屋の棚に鯨話になっているように並べてある。日本であれば重文になるような皿や壺が無雑作に並んでいる。これは、いろいろ理由があろうと思うが、最大の原因は私はやはり収蔵品の点数の相違にあると思う。大英博物館などは大きなコレクションが何回も寄付されたり、購入されたりして数万点の収蔵品がどさりと入って来て、そのたびに建て増している。つまり品物が先に入って、展示や収蔵に困るというのが実状であるが、日本の場合は建物が先にできて、展示品はそれから集めるという方が多いようである。近頃続々と出現しつつある地方美術館は勿論であるが、上野の博物館も例外ではない。国立博物館に先年立派な東洋館が完成したが、あの東洋館の建造中、当時の学芸部長が列品の品揃えに苦慮していたことを私は知っている。つまり、ウフィツィ美術館もヨーロッパ一流美術館の例に漏れず品余りに悩んでいるということである。

さて、私の評点法に移ろう。建物は少々狭いが、内容から考えて星4つというところであろう。

(3) 花のサンタ・マリア寺院

始めに書いたように、フィレンツェといえばメディチ家を想起するのであるが、それともう1つ、忘れてならないのがドームを持った最初の教会・花のサンタ

・マリア寺である。中世紀には教会といえばゴシック様式に限られていた。有名なパリのノートル・ダムはあまりゴシック独特の尖塔がないように思うが、それでも数えて行けば数十を降らない。尖塔建築の代表のようにいわれているランスの修道院などは、まるで針鼠のように数百の尖塔が林立している。

東方貿易で裕福になって来たフィレンツェの商人達は、ちょうど16世紀の日本の堺の町の商人達が覇気と自由進取の精神に溢れていたように、中世の^{くびき}軛を払い退けることを考えていた。あたかもそのとき教会建築の議が起って、新進気鋭の彫刻家兼建築家ブルネレスキに、その新事業が託された。ブルネレスキは、何とかして無数の柱の集合によって高さを生み出すゴシック様式から脱却したいと考え、八角形の壁石の上辺を八方から少しずつ持ち寄り式に狭めて行って、アーチ型の円屋根を造ることに成功した。これが、ドームといわれて、ちょうど天空のドームの下に小空間を区切ったような感を与え、当時の小国家として独立を希求するフィレンツェ市民の大歓迎を受けて、その後の教会建築を一変することになったものである。これが建ち始めたときは、メディチ家もまだフィレンツェの政権を掌握してはいなかったようである。しかし、若き日のミケランジェロは、このドームを研究していたに違いなく、後年ローマのサン・ピエトロ大聖堂の改築に際して、あの大ドームを築造している。このドームは教会だけに限らず、その後ルネサンス様式として宮殿・公共建物に盛んに応用されている。

(4) アカデミア美術館

アカデミア美術館というのは、私は今度の旅行でここへ来るまで聞いたことがなかった。博物館事典なんかを見ても、名前だけは出ているが、展示品の説明はない。ここは絵画と彫刻とであるが、絵画の方は小品ばかりで目立つものはなかった。ところが彫刻室へ入って私は愕然として眼を瞪った。なんとミケランジェロの「ダヴィデ」があるではないか。まず原作かどうかを眼を皿のようにして確かめて見た。500年間風雨に曝されていたのにしては綺麗すぎるという疑問が浮かんた。しかし、今度屋内に入れるについて入念に払拭されたことが考えられる。ヨーロッパにおいても酸性雨の問題が起っている。独仏の国境地帯にあるシュワルト・ワールド(黒い森)の密林に枯木が目立ち始めたことがとり上げられている。そこはすぐ西麓にアルザスの工業地帯を控えているから無理もないと思う。しかし、フィレンツェはそこから600キロも離れており、

その上、付近には工場などは1つもなく、さし当り、日本ならば小京都といわれるような山狭の古都である。500年経った現在も目立つ程の損傷はなかったであろうが、時節柄、雨露に曝すことは差控えたのであろう。それにしても、その辺の事情を説明するコメントは一切無さそうである。けれども、レプリカであればその旨の表示がある筈であるから、それが無いところを見ると、原作に間違いなからう。つまり、実物大のレプリカをメディアチ家政庁前に置いて、そこにあった原作をこのアカデミア美術館に持って来たというわけである。

この「ダヴィデ」の原作にお眼にかかったことは勿論私を驚喜させることであったが、ここで、もう1つそれに劣らない感動に身内が温くなるのを覚えた。それはミケランジェロの制作半ばの、等身大の人物像の未完成品が5, 6体も展示されていたことである。私は実はミケランジェロの制作過程について次のように聞かされていた。「ミケランジェロは不世出の天才で、原材の大理石塊を見たら即座に、それに合う題材とその完成品のイメージを思い浮かべることができる。そして制作のときには、原材をフルに生かして、像の出張ったところが隅々まで原材の皮一重のところまで使われているといわれている。」これは、もし事実とすればまさに神業で、常識としては考えられないことである。天才を誇大に吹聴する褒め言葉として、私はある程度の割引感を持って聴いていた。ところが、ここで「ダヴィデ」と5, 6体の未完成品を観ることで、この褒め言葉が真実に近いと思うようになった。どうしてそうなったかを次にお話ししようと思う。

1505年3月、ミケランジェロは教皇ユリウス2世に招かれてローマで仕事をするようになった。教皇は自己の権勢を後世に伝えるべく、壮麗な廟墓を造ることを彼に依頼した。ミケランジェロはフィレンツェ自由都市の市民であるから、教皇のような権勢家の仕事を引受けることは気が進まなかったのであるが、教皇と話をしているうちにこの廟の建設が、彼が日頃夢に描いていた大理石の大群像を造ることを実現できるまたとないチャンスであることがわかってきた。そこで彼は意を決して、その仕事を引受けることにし、その厩大な原石を自ら掘り出すべく、大理石の採掘地カルラに8ヶ月も宿泊して、意にかなう原石を集積して行った。その8ヶ月はミケランジェロにとって最も充実した期間であったろう。彼は日々大群像の構想を練りながら、発掘を指揮するかたわら、気に入った原石

を仕上げて行こうとして、数体を掘りかかっていた。そのときに何体位が仕上がって、何体位が未完成であったかは、知るよしもないが、やがて原石が揃ったので、それを運ぶ手筈を打ち合わせるべく、仕上途中のものを運ばせてローマへ帰って来たミケランジェロは教皇と会って、いきなり大鉄鎚を頭に振り下されたようなショックを受けることになった。我儘で気まぐれな教皇は、ミケランジェロが孜孜として準備を進めている間に、すっかり心変わりしてしまって、廟墓の建設はとり止める、その代り外の仕事をしてもらいたいと事もなげに言い放ったのである。怒り心頭に発したミケランジェロは何もかも放り出して、未完成品だけを持ってフィレンツェへ帰ってしまった。そのときの未完成品が、今、このアカデミアにある数体に間違いないと思われる。その理由は、第一にその人物像が廟墓の装飾用にピッタリのものであること、第二に、その未完成品のところどころ仕上げられた部分の出来栄だが、作者の充実した意欲の張りを端的に表わしているからである。私がミケランジェロの天才を褒めたたえる言葉が、単なる言葉だけでなく、真実を語っていると感じたのは、先にも書いたが実はこの一部分仕上げられた人体像を見た瞬間であった。その未完成品は、原石の中央から下が前半分位掘り上げられていて、そこに男子成人の下半身が仕上げられている。ちょうど生き埋めになっていた人を土中から掘り出したら、生きていた。というように、その下半身像は、身体中に血が通っていて、呼吸をしているように私には思えたのである。これが、私が第二の理由として、アカデミアの未完成品数体を廟墓群像の一部と見做す所以である。これ程の、技神に入る傑作はいかに大天才といえども、一生のうち何度もあるものではない。廟墓群像の準備中はミケランジェロにとって、その一生のうち何度かの意欲昂揚期であったことは間違いないからである。普通彫像を制作するときは、スケッチを描いて、イメージ作りをしてから、大体の姿体を仕上げ、次にディテイルに及んで行くものである。ところがミケランジェロはイメージができるといきなり原石の片端から仕上げに行く、まるで石の中に埋まっている像を掘り出して行くようであったと伝えられている。私は日頃それを聞いて、幾分割引して聞いていたようであるが、アカデミアのこの未完成品を観てから、文句なしにその伝承を信じていいと思うようになった。

さて、ミケランジェロについてはまだ話したいことがあるが、紙数も少なくなってきたので、アカデミア

術館を辞して次へ行くことにしよう。(星3つ)

(5) ポンテ・ヴェッキオ(ヴェッキオ橋)

14世紀から15世紀にかけての、フィレンツェの全盛期に建造された珍しい、橋の欄干のところが商店の店舗が建並んで、橋全体が商店街になっているという、さすが世界一土地急騰の東京も顔色なしという空間利用振りである。ウフィツィ宮とピッティ宮を結ぶ位置のアルノ河に架った橋で、往時の目抜通りである。昔は本屋が軒を並べていたそうであるが、現在は土産物店に変わっている。

さて、これで私の見たところは述べ終ったのであるが、なにしろローマから230キロの道程を一日でバスで往復しようというのであるから、ほんの一部しか廻れない。本腰でルネサンスの気分に入ろうと思ったら、最低2泊3日位は必要であろう。参考のために私が見落した施設を主なものだけ挙げておこう。

(6) サン・ロレンツォ寺院

メディチ家の霊廟のある寺院で、ブルネレスキ、マネッティ、ミケランジェロ三巨匠の手によって建て継がれたもので、特にミケランジェロによって建てられたロレンツォ・メディチの墓にはミケランジェロの傑作「昼」・「夜」・「あけぼの」・「たそがれ」と題された四部作がある。

(7) メディチ宮殿

1540年までメディチ家宮殿として使用されていた建物で、現在は博物館となっている。

(8) 国立美術館

中世風の建物で、ミケランジェロ、ドナルテルロの彫刻、工芸などが展示されている。

(9) オルサンミケーレ教会

フィレンツェでは珍しいゴシック建築の教会。

(10) 考古博物館

エジプト出土品及びエトルリア出土品を展示。

(11) アンジェリコ美術館

サン・マルコ修道院附属の美術館で、フラ・アンジェリコの有名な「受胎告知」「最後の審判」などがある。

(12) サンタ・クローチエ寺院

(13) ミケランジェロの家(博物館)

(14) サンタ・マリア・ノベッラ教会

(15) サンタ・マリア・デル・カルミネ教会

以上で、古代・中世のローマとルネサンスのフィレンツェを見終ったわけである。歴史と美術に興味のない方にはⅢ・Ⅳは実に退屈極まりない時間であったと思う。

考えて見ると、イタリアという国そのものが古代ローマ時代には、数世紀にわたって地中海全域を制覇していた。当時の地中海全域といえば、ある意味で全世界を意味している。もう1つ地球上で、このローマと対抗できる文明は東アジアにおいて、只一つ、中国の漢だけであった。つまり、その当時にはこの地球上に東西2つの文明世界があったわけである。この2つの世界は、当時の交通事情から考えて、国と国とが接することはなく、別世界をなし、その間僅かにシルクロードを通じて、細々とお互いの産物を交易し、お互いに他の別世界を認識し合うだけであった。その西の大国ローマの中心地であって見れば、遺跡に埋もれているのも当然であろう。そして、その次は、中世の暗を切り開いたルネサンス発祥の地、フィレンツェを見た。これで私はイタリア半島に別れを告げ、「新大陸発見」の立役者コロンブスのスポンサーとなったイサベラ女王の国、スペインと「大航海時代」の魁となったヴァスコ・ダ・ガマを生んだポルトガルのあるイベリア半島へと向かうことになった。今回はここまでにして、次回でマドリッドとリスボンを訪れることにする。